

<樋口一葉の生涯と作品>

樋口一葉は、明治5年5月2日、現在の千代田区内幸町付近に生まれ、珠玉の名作を後世に遺し若くしてこの世を去りました。一葉の戸籍名は奈津ですが、なつ、夏、夏子とも自署しました。

しかし一葉の短い生涯はほとんど貧苦のなかにはありました。一葉十五歳の時に長兄が結核で死去、父則義は事業に失敗して死去、十七歳の時には一家を支えなければならなくなりました。一葉は小説家として身を立てることを決意して半

井桃水に師事し、妹邦子に支えられながら図書館通いなどをして文筆活動を続けました。また雑誌「文学界」メンバーとの交流を通じてキリスト教に親しみ、聖書も読んでいました。

立教大学所蔵の一葉自筆『詠草』は十二歳から晩年の二十四歳まで四十数巻が書き続けられた和歌の練習帖です。そのうち4冊が立教に所蔵されています。一葉は小説家として有名ですが、和歌は、一葉文学の基底にあったともいえます。

明治27年に『大つごもり』、翌年には『たけくらべ』、『十三夜』などを矢継ぎ早に発表し、森鷗外などから絶賛され、文名も高まりましたが結核に倒れ明治29年11月23日に亡くなりました。享年24才でした。



『たけくらべ原稿』（組本社 1982年複製本より）



一葉自筆草稿『詠草』（立教大学所蔵資料より）

<展示資料>

1. 『たけくらべ原稿 樋口一葉真筆』 編集制作 組本社 1982年
2. 『詠草』 7、19、40、44 樋口一葉著 (明治19年～28年)
※[図書館公式ホームページ「デジタル・ライブラリー」](#)より全頁を閲覧できます。
3. 『複製近代文学手稿100選』 / 日本近代文学館編 二玄社 1994年

立教大学図書館

※展示キャプション等については、『新潮日本文学アルバム3：樋口一葉』前田愛編集（1985年）、角川ソフィア文庫『一葉のたけくらべ』武田友宏著（2005年）などを参考にさせていただきました。

<樋口一葉「^{えいそう}詠草」について>

立教大学名誉教授 藤井 淑禎

「詠草」と聞かされても、たいていの方はピンとこないかもしれませんが、要するに、和歌の草稿を手ずから綴じたものことです。ただ、一葉の詠草に関しては、すでに旧版の『一葉全集』（筑摩書房、昭28～31）を経て新版の『樋口一葉全集』（同、昭49～平6）でほぼ完璧に紹介尽くされており、立教大学所蔵の詠草四冊もそこに見ることができます（新版全集では第四巻（上）に収録）。その四冊を、全集編者の野口碩氏による注の助けを借りて簡単に紹介してみると、以下ようになります。

- (1) 詠草 7（表書「詠草／樋口奈津子」）明治19年8月から20年4月までに詠まれた歌の中から139首の秀歌を選んだ選歌集。半紙二つ折り縦袋綴じ、本文16葉（32頁）。
- (2) 詠草 19（「廿一年四月／戀百首／樋口夏子」）百首のうち、それ以後に詠まれた十数首が書き加えられている。本文17葉。
- (3) 詠草 40（「九月より／詠艸／樋口夏」）明治27年9月から11月頃までの宿題系（※）の詠草。47首収録。
和歌本文12葉。 ※宿題系・・・一葉が歌塾で課せられた、文字通りの宿題
- (4) 詠草 44（「三月／詠草／樋口夏子」）

明治28年3月から5月頃までの宿題系の詠草。34首収録。本文10葉。

これらは昭和39年度から40年度にかけて購入され、平成3年まで当時の日本文学科研究室に置かれた後、新座保存書庫に移され、現在は立教大学池袋図書館内の貴重書庫に保存されています。その新座への移転の際、(3)に一枚だけ破取の跡が見られることに井上宗雄先生（立教大学名誉教授）が気づかれ、メモを残されました。しかし、全集の注に記載された(3)の総枚数と本学所蔵のそれとは一致するにもかかわらず、全集には破取跡への言及はなく（破取に気づいていない？）、四七首が記された一二枚の後に筆すさびに使われた二枚が添えられているかのように記してあります。本学購入のはるか以前に破取されたと思われる部分はその一二枚目と二枚の間にあるので、この破取された一枚分に記されてあったのが和歌であったのかどうかは、にわかには判じられません。

破取に注意を促した井上メモの他にも、詠草中にはもう一枚、前田愛先生（立教大学元教授）の手になると思われるメモが挟み込まれていました。(4)の最初のほうに挿入されている「巻三十九」と鉛筆書きされた紙片は、これが旧版全集では「巻三十九」に分類されていたことを前田先生が心覚えのために挟み込んでおいたものにちがいありません。

これらの詠草類がそれ自体として貴重なものであることはもちろんですが、このように歴代の先生方の体温や息づかいが感じられるという点においても、これらはまたとないわが立教の貴重な財産というべきものなのです。